

土木遺産を未来へつなぐ顕彰支援事業

土木・環境しなの技術支援センター

I 土木遺産の顕彰とは

私たちの社会生活を支えている一番下の基盤になる施設、構造物の多くが土木施設です。人や物の行き来を便利にする道路、鉄道などの交通施設、衛生的、快適な生活を支える上下水道施設、発電所などの電力施設、農業を支える用水施設、自然災害から生命や財産を守る治山治水施設など非常に広範囲に及び、これらの施設は公共的性格のことから総称して社会基盤施設とかインフラストラクチャーと呼ばれます。これらは、一朝一夕にできたものではなく、先人による営営とした努力の積み重ね、蓄積であり、先人の遺産であります。今造っているものは次世代への遺産となるはずのものでもあります。

しかし、これらの遺産はとても地味な存在で、普段一般の人々には空気のようにほとんど意識に上ることはありませんが、大きな災害に見舞われた時には、改めてその大切さが認識されます。

先人の遺産である土木関係施設・構造物のうちとくに歴史的・文化的に価値の高いものを、尊敬をこめて「土木遺産」と呼んでいます。このような古い施設・構造物を一律に更新してしまうのではなく、それらを適正に管理し、地域の文化的資産として活かしていくことが、私たちの生活を一層豊かにすることに繋がると考えています。

長野県内には、すでに重要文化財に指定された牛伏川の砂防施設である階段工、激流の天竜川を一跨ぎする建設時に東洋一とされた坂戸橋をはじめ、各地に多くの土木遺産があります。そしてそれらは、現役の土木施設として、地域を支え、自然災害から住民の生命と生活を守っています。

このような土木遺産を将来へ引き継ぐべき、文化財としての顕彰していくことは、文化財関係者、建設関係者の共通の目標として推進していくことが望まれていると考えられます。

II 土木遺産の顕彰事例（文化財指定）

1 坂戸橋（上伊那郡中川村区の重要文化財指定）

1933年に建設された鉄筋コンクリート製のリブアーチの上路橋に分類される。

橋長 77.8m、橋高 20m、幅員 5.5m、スパン 70m、アーチライズ 12m で、建設当時は東洋一のスパンを誇り、1965年（昭和40年）以前に造られた現存する鉄筋コンクリート製アーチ橋としては、現在も日本一の長さを誇る。

以前木橋の時代、激流天竜川の出水に耐え切れず、数度の被災をうけた。川の兩岸地域を結ぶ重要な交通路として、



地域の熱い要望をうけて、長野県の事業としてコンクリート造りの永久橋への架け替えが実現した歴史を持つ。開通式には1万人の人々が参加し、矢作水力の資金協力もあったとされる。この橋の技術的、歴史的な価値を顕彰する2010年の登録有形文化財、2020年の重要文化財指定に関して、信州大学小西純一名誉教授、土木・環境しなの技術支援センターは、管理者である長野県や地元中川村に協力し、その実現を支援している。

2 久米路橋、坪根えん堤などの登録有形文化財指定（2021年）と支援



(1) 久米路橋

県歌信濃の国の四番は、それまでメロディーを変え、雅しく信濃の名所が歌われる。その1つに「心してゆけ 久米路橋」が登場する。久米路橋は、松代藩の公式名称では水内橋と呼ばれ、17世紀にはその名前が登場する。近代になり、要路として昭和8年久米路橋は永久橋となる。その型式は、鉄筋コンクリートアーチ橋、その特徴は景勝地にふさわしく、アーチ桁の側部に「鉄平石」が装飾として張られ、現在もみることができる全国での希少の事例である。

(2) 坪根えん堤

長野市街地に流れ込む一級河川 裾花川（すそばながわ）は、戸隠連峰などを水源とする。この川の中流に設けられたのが坪根砂防堰堤である。堤長67m、堤高17m、アーチ式コンクリート造堰堤で、表面に切石で精緻な谷積を施す。昭和24年キティ台風等により、下流の長野市街地に大きな被害が発生したことから、その対策として砂防のための貯砂に加え、洪水調節を目的としている点が他には例を見ない特徴である。

以上の2つの施設の文化財登録にあたり、土木・環境しなの技術支援センターは、県と共に技術的な評価や歴史的な価値。補修関係についての提言や現地調査活動を行っている。

Ⅲ さらなる土木遺産の顕彰を促進するために

土木・環境しなの技術支援センターは、長野県（建設部）長野県教育委員会と協力して、土木遺産の顕彰をさらに促進するため、次の取り組みを行った。

(1) 共催による研修会の実施

- ・文化庁文化財調査官による講演、事例発表
- ・対象、市町村関係職員、県の建設関係職員

※2月に実施を予定したが、コロナ感染症対策上、其の実施を現在延期している。

(2) 研修会テキストを兼ねる資料ガイドブックの作成

今後の取り組みに参考となる資料、県内の土木遺産リストなどをふくめたガイドブックを作成した。

関係機関等へ配付し、土木遺産の周知や顕彰活動に役立っていく予定である。

